

J.LEAGUE NEWS PLUS

スポーツで、もっと、幸せな国へ。
百年構想
 J.LEAGUE

編集・発行 社団法人 日本プロサッカーリーグ
 ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

Vol. **6**
 13. Jan. 2009



ブーイングなき残留争い

～12.06 フクアリの奇跡～

J.LEAGUE OFFICIAL SPONSORS

Calbee Canon KONAMI AiDEM マイラン製薬 Leoplace21 plus Coca-Cola

NETWORK PARTNER



J.LEAGUE 100 YEAR VISION PARTNER



J.LEAGUE OFFICIAL BROADCASTING PARTNER



LEAGUE CUP SPONSOR



J.LEAGUE ALLSTAR SOCCER SPONSOR



SUPER CUP SPONSOR



EQUIPMENT SUPPLIER



J.LEAGUE OFFICIAL SUPPLIER



2008年12月6日、Jリーグ最終節——。この日は日本中のサッカーファンにとって、特別な日となった。J1リーグ戦の優勝争いは首位の鹿島アントラーズとこれを追う名古屋グランパス、川崎フロンターレの三つどもえの戦い。また、AFCチャンピオンズリーグ(ACL)出場圏である3位以内を目指したのが、4位の大分トリニータと5位のFC東京。さらに、J1残留争いでは13位の大宮アルディージャから17位のジェフユナイテッド千葉までの5クラブが降格を免れるべく、最後の決戦に向かおうとしていた。一方、J2リーグ戦も白熱していた。すでに優勝はサンフレッチェ広島が、2位はモンテディオ山形が手中に収めていたが、J1・J2入れ替え戦への出場については、3位のベガルタ仙台から6位のサガン鳥栖までの4クラブが可能性を持っていた。全国のスタジアムで、わがクラブの勝利を目指す選手とサポーターの熱い戦いが行われていたのである。

サッカーの母国・イングランドでは、プレミアシップだけでなく、4部、5部といった下部リーグの試合結果も主要メディアで報道される。サッカーファンが毎週末、全国の地方都市の名に真剣なまなざしを凝らす彼の国の豊かなサッカーシーンに、12月6日のJリーグは、限りなく近づいた。

この「サッカーの日」の主役はもちろん、札幌ドームでJリーグ史上初の2度目の2連覇を達成した鹿島。新たな黄金時代を印象づけた。そして、フクダ電子アリーナではもう一つのドラマが起きていた。残留のために勝利が必要だったジェフ千葉は、試合の74分が経過したとき、2点のリードを許していた。残りわずか16分。そこから、ジェフは奇跡の逆転残留を果たして、日本中のサッカーファンを驚かせた。

ところでジェフのサポーターは、この劣勢の試合の中で

一度もブーイングをしていない。またこの試合だけでなく、シーズンを通して残留争いに低迷し続けたチームに対し、ブーイングや抗議をしなかったという。奇跡の大逆転の舞台裏で、クラブとサポーターの間に何が起きていたのか。一年にわたる彼らのチャレンジを追った。

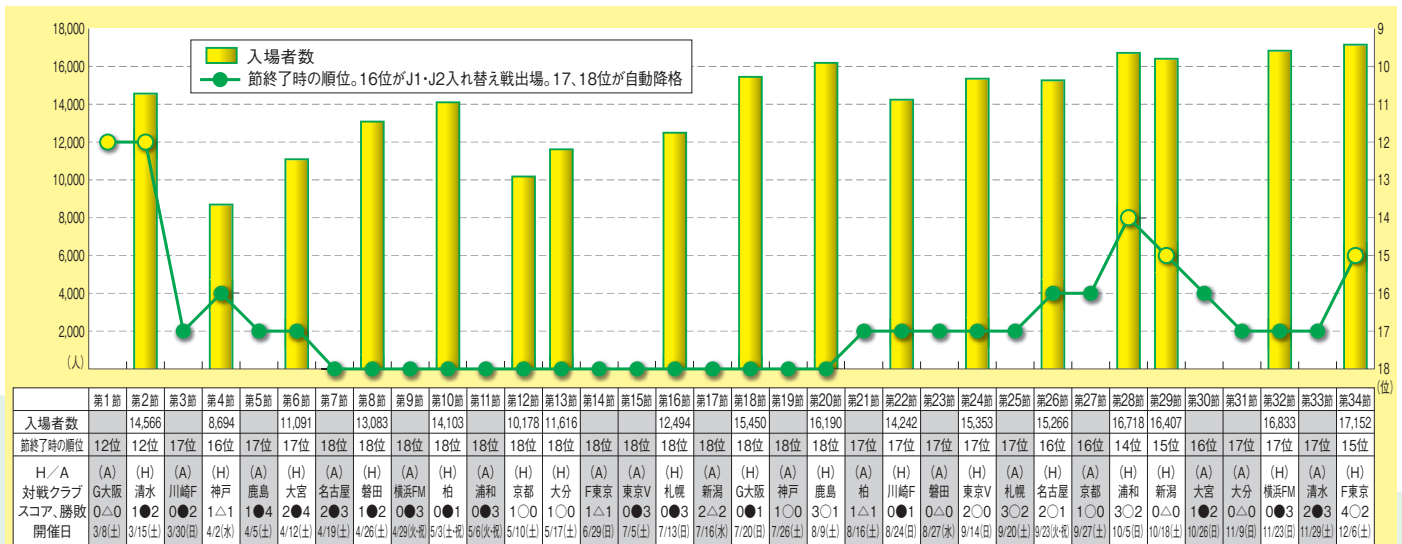
11戦2引き分け9敗

2008シーズン前、ジェフユナイテッド千葉は羽生直剛、山岸智、佐藤勇人、水本裕貴、水野晃樹という日本代表にも名を連ねた主力選手5人を失い、戦力に大きな不安を抱えていた。各サッカー専門誌の論調も「今年のジェフは厳しい」「あの戦力で大丈夫か」というものだった。3月8日にシーズンが始まると、それらの予想でさえ、まだ甘い見通しだったことが分かった。ジェフは開幕戦から5月6日の第11節まで、一つの勝利も挙げられなかった。11戦2引き分け9敗、シーズンのほぼ3分の1が過ぎて獲得した勝点は、わずか2点にとどまった。

しかし、チームが低迷を続けるこの間、ジェフのホームであるフクダ電子アリーナのゴール裏からブーイングが起ころことは、一度もなかった。それどころか、連敗を続けるチームに「大丈夫だ！次がある！」「おれたちと一緒にがんばろう！」と声援を送り続けた。サポーターのひとりには、「ブーイングをしないという申し合わせをしたわけではない。ただ、今年のチーム状況を考えるとブーイングではなく、声援を送り続けるという選択を、みんながしただけ」と言う。

4月29日の第9節、横浜F・マリノスに0-3と完敗し5連敗となったその試合後、ジェフのサポーターたちはスタジアムの周りに残り、夜中の11時過ぎまで話し合った。コアなサポーターのみならず一般のファンも含めて100

ジェフユナイテッド千葉 2008シーズン データ



人以上が集まった。中には「いい加減ブーイングをした方がいいのではないか」「むしろ応援を放棄するくらいのも考えた方がいい」といった意見の者もいた。だが、話し合ってみると、「今季の厳しいチーム状況の中、ジェフに残ってくれた選手はおれたちの宝。ブーイングをするよりもまず、歌やコールにメッセージを込めて、選手を励まし続けよう」という意見が主流を占めた。

理屈ではない関係

5月1日に就任した三木博計社長は、5月3日の柏レイソル戦、5月6日の浦和レッズ戦でも連敗したチームを改革するべくヨジップクゼ監督の解任を決断。リバプールFC（イングランド）でヘッドコーチを務めていたアレクスマラー氏を後任監督に招へいする。

ミラー新監督が成田空港から直接フクアリへ駆けつけた5月10日の京都サンガF.C.戦（指揮は澤入重雄ヘッドコーチ）、指揮官の交代に決意を新たにした選手たちは工藤浩平の挙げた1点を守りきり、シーズンの12戦目にしてようやくリーグ戦初勝利をもぎ取った。試合後、キャプテンの下村東美はゴール裏サポーターと共に万歳した後、「おれたちは絶対に、絶対にあきらめない」と叫んだ。

ミラー効果でチームはいったん、波に乗る。続く大分戦にも勝利し、リーグ中断期間に行われた2008 Jリーグヤマザキナビスコカップの予選リーグも2勝1分と負けなしで乗り越えた。しかし、リーグ戦再開となった6月29日のF東京戦に引き分けると、続く東京ヴェルディ戦、コンサドーレ札幌戦という残留争いのライバルとの連戦を共に0-3というスコアで惨敗してしまう。

ここで、再びサポーターが動く。札幌戦後のスタジア

ムに残り、社長との話し合いを求めたのだ。それは社長に文句を言うためではなく「クラブとサポーターがバラバラでは乗り越えられない状態だったから、クラブの考えをみんなで聞きたかった」（サポーター）ために起こした行動であった。そして、サポーターが待つスタンドを三木社長と昼田宗昭チーム統括本部長が訪れ、夜が更けるまで腹を割って話し合った。「クラブの考えをしっかりと説明してくれたことで、クラブとの強い絆を確認できた」（サポーター）。このときのことを三木社長は「プロサッカークラブの経営というのは、理屈ではない。サポーターと同じ土俵に立って腹を割って話し合った方が、お互いにとって結果的に良い方向に向かっていくと考えた」と振り返る。7月13日は、クラブにとって大切な夜となった。



「観客席とピッチの距離が近く、大声援が反響するフクアリで試合ができたことも勝因の一つ」と語る三木社長

「今こそ！WIN BY ALL！」

8月9日の第20節、チームは首位に立っていた鹿島を3-1で撃破。次節の柏戦を1-1で引き分けたことで、第7節から定位置となっていた最下位を脱した。しかし、その後の2試合では勝利から見放され、夏休みが終わって残り11試合の段階でもまだ、自動降格圏に沈んでいた。

次戦まで2週間以上空く9月初旬の中断期間中、クラブは「今こそ！WIN BY ALL！」というキャンペーンを開始する。残り3分の1というシーズンの正念場を迎える



試合前にはコンコースを回り、気さくにサポーターと言葉を交わす三木社長（写真右）。サポーターから「名刺をください」と言われて特製の名刺（写真上）を2,000枚作成した。この名刺の裏面には通し番号が印刷されていて、末尾「0」の名刺を持っている人には非売品の2009年カレンダーを社長が手渡しでプレゼントした

